アマガミ(仮)

いーくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アマガミ（仮）

【Ｎコード】
Ｎ６５８０Ｘ

【作者名】
いーくん

【あらすじ】
アマガミの「今」を切り取った、短編集です

色々更新予定

「君と私と雨宿り」（前書き）

前書き

駄文ですが、最後までお付き合い下さい

「君と私と雨宿り」

「じゃあね、響ちゃん」

「またね。はるか」

その日、いつものように響ちゃんと別れ、帰ろうとした。

だけど……

「あっ、そうそうはるか」

後ろから響ちゃんに呼び止められる。

「雨降ってるけど、大丈夫？　」

「え？　雨」

こりゃ当分帰れそうにないや。

「君と私と雨宿り」

雨の降る中、私は学校の玄関で雨脚が弱まるのを待っていた。

はぁー……

なんでこんな日に雨なのかな？

響ちゃんには傘があるから大丈夫って言ったんだけど、まさか今日に限って忘れるなんて……

学校の玄関から眺める雨はちっとも弱くならない。
逆にだんだん強くなっているような気もする。

「困ったなぁ。こりゃ帰る時間、遅くなりそうや」
そんなことを思ってると

「あれ、森島先輩？　」

後ろから突然名前を呼ばれる。

「あれ、橘君？　どうしたの？　」

そこには、最近知り合った橘　純一君が、たくさんのノートを抱えて立っていた。

「先輩こそ、帰らないんですか？　そろそろ暗くなりますよ？　」

「うーん、帰りたいのは帰りたいんだけど……」

チラッと外の方を見る。

「ご覧の通り雨なのに、傘を持ってきてないのよね」

「だったら僕のを貸しますよ」

やっぱりというか、予想通りの返事が返ってきた。

「それは駄目。それだと橘君が帰れなくなっちゃうじゃない」
「僕は走って帰りますよ。大丈夫ですよ、この程度の雨くらい」
「だからダーメ」
「うぅ……」
まるで叱られた子犬のようにうなだれる橘君。
もう！ほんとに可愛いんだから。
「君が雨の中、走って帰っちゃうと、次の日に風邪を引いたりしたら申し訳ないでしょ」
「そうですよね……」
「それに……」
私は橘君が持っていたノートの束を指差し、
「橘君、まだ用事があるんでしょ。こんな所で油売ってていいの？」
「あぁ、そうだった！　これを高橋先生に持っていかなきゃ！　それじゃ先輩、失礼します」
そう言って、駆け足で職員室の方に消えていった。
まだまだ雨、やみそうにないや。

「森……輩……下さい」
誰かが私の肩を叩いてる。
誰だろう……？
「森島……起きて……」
うーん、後少し。
「森島先輩、起きて下さい」

その言葉で目を覚ます。
どうやら、寝てしまってたみたい。
寝ぼけた調子で辺りを見渡すと、
「あれ、橘君？　どうしてここに？」
「どうしてって、僕も用事が終わったんで、帰ろうとしたら森島先輩がウトウトしてたもんで……」
そうだった。私、雨が止むのを待ってたんだっけ。
でもまだ降ってるけど。
それでもさっきよりは弱くなっていた。
「先輩、疲れてるんですよね？　やっぱり僕の傘、貸しますよ」
「だ、大丈夫だって！　このくらい……その……平気だもん」
「ほ、本当ですか？　その割に顔色が良くないようですが……」

「だ、大丈夫大丈夫！」

（そんな顔しないでよ。　こっちまで落ち込むじゃない）

「橘君は帰らないの？

「この状態で帰れる訳ないじゃないですか」

「え？」

「森島先輩を一人にして帰れる訳ないじゃないですか」

そんなことを笑顔で言わなくても……

ほんのちょっと、沈黙が流れる

でもそれは―

「あ、見て！　橘君！」

「え？」

いつの間にか雨は上がり、綺麗な青空が広がっていた。

「んーやっぱり晴れると気持ち良いね」
「そうですね」
「こんなに気持ちよくなれるのなら、たまには雨の日もいいかもって思うわね」
大空に向け、精一杯伸びをする。
その時見つけた青空一杯に広がる虹。
「見て！　虹！」
「え？　ほんとだ……綺麗ですね」
さっきまでの憂鬱なきもちが嘘みたいに消えていた
これって、隣りに橘君がいるからかな？
自分の気持ちに確信が持てない。
「あの、橘君！」
「先輩！　僕、今から用事があるんでお先に失礼します！」
そう言って走り出す橘君。
「あ、ちょっと！」
……

もう、用事があるなら私と一緒に待たなくてもよかったのに……

でもそこが、あの子の魅力なのかな？

「どうしたの、はるか？　こんな所で……あぁ」

後ろから響ちゃんが話し掛けてくる。

「わかる？　響ちゃん」

「分かるわよ、そりゃ……そんなにニヤけてればね」

「ふふふーん」

どうしよう！　にやにやが止まらない。

「橘くーん！」

こんな気持ち初めてかも！

大声で名前を呼ばれて、少し驚きながら、振り返る橘君。

「ありがとう！」

それに答えるように手を振ってきた。

その後、橘君の姿が見えなくなるまで、私は手を振っていた。

「さっ！帰りましょ、響ちゃん」

「はいはい……」

雨上がり、虹がかかる青空の下、私は走り出す。

「ちょっと待ってよ！　はるか」

胸のときめきが止まらない。

今日は眠れないかも。

雨の雫が垂れている花を見つけ、立ち止まる。

私の中で、恋のつぼみが今輝きだす。

「君と私と雨宿り」（後書き）

アトガキ

次回は棚町　薫編です

「うたかたＤＡＹ、Ｓ」（前書き）

棚町　薫編です

「うたかたDAY、S」

いつもの帰り道、私達はいつものように3人並んで帰宅していた。
いつもと同じ光景―

それが心地よくて、こんな時間がいつまでも続けばいいと思った。

でも―

そんな時間は続かない。
いつかは終わってしまう。
だからあたしは―……

「ほら、純一！　行くわよ！」
「行くって、どこにだよ？」
「それは行きながら決めるの」
「全く……唐突だな。薫は」
「ははっ大将、そう言っても、いつものことじゃねぇか」
「ほらっ、行くわよ」

「はいはい……」

あたしは二人の手をとって、無理矢理走り出す。

「い、痛い！　薫！　もう少し優しく引っ張ってくれよ」

「ぐずぐずしないの。　ほら、行くわよ」

今のこの時間を精一杯楽しむんだから！

「うたかたＤＡＹ、Ｓ」

それは恵子の一言から始まった。

「ねぇ薫、駅前に新しくお店ができるんだって」

「駅前に？　それってどんなお店なの？」

「さぁ、よく分からないんだけど、聞いた話によるとなんか凄いらしいよ」

「どのように凄いのよ……」

「で、こんど二人で行ってみない」

「良いわね！　賛成」

こうして、あたしと恵子は翌日にその謎のお店に行くことにした。

翌日

「ってな訳で、その肝心の店がどこにあるか探すわよ」

「ちょっとまて薫。　なんで僕達が探さないといけないんだ」

「いいじゃない別に。　文句があるなら、場所を忘れた恵子に言いなさい」

「うぅ……ほんとにごめんなさい」

全く……恵子も恵子なんだから。

「田中さん、そのお店がどこら辺にあるか大体でいいから教えてくれると探し易いんだけど」

「えぇと……たしか駅から歩いて１０分くらいって聞いたけど」

「だったら二手に別れて探した方がいいかも」

「そうね　その方が早いし」

「だったら僕と薫で西口方面を探すから、梅原と田中さんで北口方面を探そう」

「ラ、ラジャー」

「任せろ大将」

「それじゃ純一、あたし達も行くわよ」

「う、うん」

「ねぇ純一　あんた卒業したら進路どうするつもり？」

「進路？　まだ具体的には考えてないけど……一応進学かな」

「ふーん」

「そういう薫こそどうなんだよ」

「あたしも一緒みたいなものよ」

「ふーん……」

「それにしても見つかんないわね。　恵子め、ほんとにそのお店あるのかしら」

「梅原達も探してるんだし、もう少し探してみようよ」

「ここ……みたいね」

少し小ぢんまりしてるけど、新装開店って書いてあるし、多分ここで間違ない。

「さて、あとは一回駅に戻って……」

「おーい、薫ー」

「え、恵子？」

見ると、恵子達が手を振りながらこっちに向かってきていた。

「薫も見つけたんだ」

「遅いじゃない！　あたし達が先に見つけるなんて」

「ごめんごめん。　人に聞いたらここしかないって」

「早速入りましょ」

「中々良い場所ね」

「そうだね」

四人席に案内され、座る。

「で、何頼む？」

早速、メニュー見てみる。

「これなんかどう？」

恵子が隣りから、メニューを指差してくる。

「ほんと、美味しそうね」

「なぁ、大将。　俺らついていけないんだが……」

「梅原、僕もだよ」

一通り食べ終えたあたし達は、いつものように雑談していた。

これといって、他愛もない会話。

今日はなにがあった。　テストがどうだこうだ。　純一が今日もドジしたとか、あたし達の間に会話が尽きることはなかった。

こうやって、一つ一つ大切なものを見つけていくんだと思った。

翌日

「おはよっ！」

「薫か、今日も元気だな」

「当たり前じゃない！　ほらっ早くいかないと遅刻するわよっ」

「ま、待ってよ！　行くよ、梅原」

―こうしていつものように駆けて行く。

あたしの毎日がきらめいていく。

「うたかたＤＡＹ、Ｓ」（後書き）

えーどーも、いーくんです

今回「うたかたＤＡＹ、Ｓ」をかいてみて、反省すべき点はまだ薫の話を一つも見てないことです

ゲームの方も未クリアです

これからも駄文を投稿していくと思いますが、温かい目で見守って下さい

次回は順番どおりにいけば、中多紗江になりますが、どうなるか分かりません

多分、別の話がはいると思います

―それでは

「PROLOGUE」（前書き）

シリーズものです

長い目で見守って下さい

「PROLOGUE」

朝、いつものように起き、身だしなみを整えて台所に向かう。今日の昼飯をどんなのにするか考えながら、冷蔵庫を開ける。　あまり材料が残ってなかったので簡単に焼飯を作る。　その後、朝食を簡潔に済ませ、学校に行く支度をする。

キリのいい時間に家を出て、学校に向かう。　少し時間的に余裕があったかなと思い、いつもよりゆっくり歩くことにした。

途中、クラスメイトに何人か出会いながら、一緒に話しながら歩いて行く。丁度いい時間に学校に着く。　教室に入り、自分の机に座り、鞄の中からノートと教科書を取り出す。教室を見渡すと、登校時間のピークなのか、沢山の生徒が出入りしている。

チャイムがなり、クラスメイト達も席に着き始める。　担任の先生が今日の予定や、連絡事項などを伝えていた。それを上の空で聞き流しながら、窓の外を見る。

―何の変哲のない風景

いつもと同じ顔ぶれ

輝日東の冬

変わらない僕達の毎日が始まる―

「ｍｅｍｏｒｉｅｓ」

巡　維月　編

「memories ?」（前書き）

詳しくは後書きで

「memories ?」

巡（メグル） 維月（イツキ）編

唐突に意識が現実へと戻り、働かない頭で現状を認識しようとする。　自分が教室の後ろの、さらに窓際に座っていて授業を受けていることまでは分かった。
先日の席替えで、運良く後ろの窓際の席に座れたことで、授業中に居眠りをする回数が増えた。

そりゃ、冬の日向って気持ちいいからね……

僕が集中しようがしまいが授業は続いていく。

さてもう一眠りするか。

もう一回夢の中へ入ろうとすると

「巡君、次に居眠りしたらどうなるか分かってんでしょうね？」

鋭い！高橋先生

このあときっちり絞られた。

「memories ?」（後書き）

急遽長編を投稿してみました、いーくんです

主人公はオリキャラです

オリジナルが苦手な方はすっ飛ばして、後の（でるかどうかわかりませんが）短編を読んでください

まだ小説を書き始めて日が浅いですがこれからがスタートとなるので感想やアドバイス等よろしくお願いします

「memories ?」

その日の放課後、僕は校内をあてもなく歩いていた。　一人暮らしで部活にも入ってないので、そのままアパートに帰っても退屈なのである。　なので、最近は放課後に学校の中をぶらぶらするのが日課になっていた。

「あれ、巡君？」

後ろから声をかけられ、振り返る。　そこには……

「うっ、塚原先輩……」

3年で水泳部　部長の塚原先輩が立っていた。

「なによ、人の顔を見るなり嫌な顔しちゃって」

「すみません……つい」

「ついじゃないわよ……ほんとに変わらないわね」

「いいことですよ、変わらないことは」

「だったら巡君の水泳部に対する気持ちも変わらないってことね」

「……まぁそうなりますね」

「君が入ってくれたらどんなに強くなったか……今からでも遅くないから入らない？」

「それは……」

言って口ごもる。

「塚原先輩も諦めが悪いですね。　私は絶対反対ですけど」

後ろから確固たる意志をもって入部反対を訴えてきたのは、1年で塚原先輩と同じ水泳部の七咲　逢だった。

「どうも、巡先輩」

「どうも」

お互い、素っ気無い挨拶を交わす。

それを見て苦笑する塚原先輩。

「相変わらず仲が悪いのね。二人共」

「悪い仲すら成立してません！」

「あらあら」

「僕は全然気にしてないけどね。七咲」

「大体、私は認めません。　こんな人が、こんな、才能、だけで何もかもできる人なんて」

僕が七咲から嫌われている最たる理由がこれだ。　七咲曰く、努力をしてないのに、できる人嫌いだそうだ。

「でもあれは仕方ないことでしょう」

僕が七咲から嫌われているのには、理由があった。

―あれは今年の夏のことだった。

「memories ?」

確かに、僕はある程度のスポーツならそつなくこなすことはできる。 ありふれた言葉で表現するならば、運動神経が良い、ということだろう。 だけど、それを間違った方向に使用すると、人を傷つけることもできることをあの時の僕は知らなかった。

―夏

僕が高校に入って2回目の夏だった。

この時期は部活が忙しいらしく、グラウンドで運動部が慌ただしく活動していた。 僕はそれを何気なく眺めていた。

「何をそんなに眺めているのかな?」

僕はこの時に塚原先輩と知り合った。 その時まで僕は塚原 響なんて先輩知らなかったし、これからも関わりがあるとは思わなかった。

「えっと、どちら様で?」

「あぁ、挨拶もしないでごめんね。私は3年の塚原 響、よろしく」

「どうもです。 で、3年の先輩が僕に何の用です?」

「警戒してるね。そりゃ3年生がいきなり話しかけたらびっくりするよね」

「……」

「まぁ、大した用事じゃないんだけどね、ちょっと水泳部までついてきてくれるかな？」

「は？　水泳部」

ここでようやく合点がいった。　要は勧誘なのだ。

「良いですよ。　どうせ暇ですし」

「良かった」

こうして僕は、塚原先輩と一緒に水泳部まで見学にいくことになった。

「memories ?」

「どう？　少しは興味をもってくれた？」

プールでは水泳部の部員達が懸命に練習していた。

「どうって言われましても……」

「今からでも遅くないから、水泳部に入らない？」

部長から直々の勧誘となれば、それは勿論入部した方がいいかのもしれない。　むしろ入部しなければ勿体ないくらいだ。

だけど、僕には水泳部に入ろうとする気持ちは全くといっていいほどなかった。

「誘いは嬉しいんですが、お断りします。　こういうの、割に合わないんで」

「そう……」

それっきり、塚原先輩は黙ってしまった。　するとプールから上った一人の生徒がこちらに向かってきた。

髪はショートで大人びた印象は相変わらず、やや鋭い目付きが特長の、七咲　逢だった。

「こんにちは。塚原先輩。　こちらの人は」

「2年生の巡君よ。　水泳部に入部させようと思ったんだけど、断られちゃった。

「巡……」

僕の名前を聞いた瞬間に表情が曇る七咲。　やがて思い付いたように顔をこちらに向け、

「あの、失礼ですが、輝日南中出身ですか？」

「え？　そうだけど……」

「塚原先輩はこの人のこと、知ってるんですか？」

「えぇ、勿論知ってるわよ。だから連れてきたのよ」

なんか知らないけど、どうやら僕のことを話してるのは間違いないようだ。　2人共少し話し合っていたが、やがて、

「私は反対です。　この人の入部は」

「……」

いや、入部とか勝手に決められても……ていうかなんでこんな勝手に話が進んでいってるの？　個人の意思は？　そこんとこもうちょっと大事にしないといけないんじゃないの？

「反対も何も、巡君は今さっき入部を断って……」

「大体、塚原先輩も輝日南中の巡だと知ってるなら、なんで連れてきたんですか？」

「あら、私はそういうの気にしないんだけどね」

「でも……他の部員が黙ってませんよ。　多分」

「それは何でかしら？」

「それは……」

言葉に行き詰まる七咲をおいて諭すように話す塚原先輩。

「巡君が入部して、レギュラーの座を奪われたのなら、それはあなた達が弱かっただけの話。　もし自信があるならそういう風に考えないはずよ」

「それはそうですけど……」

「僕のことを知ってる風に話が進んでいってますけど、なんでそんなに知ってるんですか」

「自覚がないんですか？あなたは」

七咲が声を荒げて言う。

「先輩が輝日南中にいた時、散々他の部活に助っ人に入って、まるで練習を積んだ部員のように活躍して、それで成績を残して、実は蓋を開けると全く練習も積んでない只の助っ人でしたって他の学校にも有名でしたよ！　どれだけ羨ましいと思った人がいるとおもってるんですか！　それなのにとうの本人は全く練習もせずに、ただ才能だけって……おかしいじゃないですか！」

「……」

正直、ここまで言われたのは初めてだった。　そりゃ、中学のころは恨みというか愚痴られたことはあったが、そういう風に思ってる人がいたなんて、考えもしなかった。

大体、中学の頃は助っ人っていっても、大事な場面は正部員が活躍したし、僕が活躍した場所なんて裏方中の裏方みたいなものだった。　それを知っていたから他の部活から助っ人がきたし、じゃないと活躍しまくる助っ人なんて、はなから採用しないと思う。

とか、当時のことをよく知る僕だからいえることで、当時の部外者で、他校の生徒である七咲がそんなことを知るよしもないだろう。

「七咲がどういう風に思ってるか分からないけど、多分想像とは違うってことだけは言えるね」

「どういうことですか？」

「誤解ってこと。　心配しなくても、水泳部には入らないし、これからも他の部活にも入る気はないから」

「……」

「巡君、今日はありがとね」

「え？　あ、はい」

あれ？　これでおわり？　ていうか塚原先輩、全く僕のこと気にしてないようで

「僕の役目は終わりですね。　それでは失礼します」

相変わらず後ろで唸ってる七咲と、それをなだめる塚原先輩を背に、水泳部の元から立ち去った。

思えば最悪の出会いだったのかもしれない。

「memories ?」

まぁ、その日から顔を合わせれば口喧嘩（一方的に七咲が噛み付いてくるだけ）の毎日だった。 しかし、日を重ねるにつれそれは変化し、今では口喧嘩が妙に心地いい、日常の一コマみたいな感じになっていた。

塚原先輩が言ってた、仲の良い2人ってのは案外、的を得ているのかもしれない。

「塚原先輩、なんであの時僕と七咲を会わせたんですか？」

「んー特に理由はないんだけど……」

時刻は昼、場所はテラス。 昼頃に塚原先輩から、お昼一緒にどう？なんて誘われて今に至る。

「案外、この2人って組み合わせたら面白そうだなって思ったの」

「なんか納得しにくいですね」

「ま、隠し事はなしにするんだったら、はるかの仕業ね」

「森島先輩が？」

そこで森島先輩が出てくる訳が思い付かなかった。

「君って、はるかとも仲がいいでしょ。　それではるかがこんなことを思い付いたのよね」

「へぇ」

適当に相槌を打ちながら考える。　森島先輩もいい加減に目茶苦茶だな。そんなこと、口に出して言えないけど。

「でも、面白いでしょ」

、にこっと笑う塚原先輩。　意外に萌えるかも。

「当事者からすれば面倒くさいんですけどね」

もう何度目か分からない台詞を吐きながら、のそのそと定食を食べる。

「そんなことないわよ。見てると楽しそうだもの、君達２人」

「今では、ですかね。　最初の方は七咲からかなり酷いことを言われたものですから。　今では子供の駄々っていうかなんていうか……」

「誰が子供の駄々です？巡先輩」

「うおっ？な、七咲？」

「これだから、先輩は」

と、同じテーブルに座る七咲。　あ、なんだかんだ言って、一緒に食べるんだ……

「隣り、いいですか？塚原先輩」

「もちろん、一緒に食べましょ」

「巡先輩はもう食べ終わったんですから、教室に戻って下さいね」

「まだ半分しか食べてないでしょ。」

何これ？　新手のイジメ？　でも負けない……

「口数の減らない変態ですね」

「悪い、それもう僕をただ罵倒しにきてるだけだよね？」

「え、あ……」

そう言われて、七咲は視線を泳がせる。　七咲はこういう所に弱い。

最近、（てかほぼ全部の）軽い口論では僕が言いくるめて勝負が終わる。（勝負っていってもあっちが勝手に言ってるだけだけど）

そういう面を見ると、やっぱり1年生なんだなって思ってしまう。

「……」
「……」
「……」（沈黙）

昼休み、僕と七咲はにらみ合いながら食事し、それを面白そうにみる塚原先輩。

なんだかんだいっても僕はこんな日常を楽しんでいるのかもしれない―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6580x/

アマガミ(仮)

2011年11月4日17時15分発行